

タイトル	20世紀英詩の主流
著者	橋本，雄一
引用	北海学園大学人文論集，12：1-19
発行日	1999-03-31

## 20 世紀英詩の主流

橋 本 雄 一

19 世紀末から始まった英詩の革新運動の試みが〈デカダン派〉、〈イマジスト〉、〈ジョージ王朝派〉という小さな振動から、“April is the cruellest month,” という衝撃的な 1 行で始まる T. S. Eliot の *The Waste Land* (1922) に至って、数百年続いてきた英詩の伝統に全く新しい局面が展開されたと思う。*The Waste Land* はパウンドが唱えた “Make it New” の精神を具現した真に新しい時代の精神と技法に貫かれた詩で、ある意味では伝統に反逆しながら、伝統を巧みに取り込むという、大胆でありながらきわめて慎重な戦略によって、みずからとみずからの文学を伝統の中に位置付けようとした。Eliot は *The Waste Land* で avant-garde な手法と古典主義を驚くほど巧みに融和させていて、この詩の性格はアメリカ人エリオットの英国社会への融和の仕方とぴったり重なっているように思われる。驚くほど革新的な詩を発表しながら、それを取り込むための広い枠組みとしてホメーロス以来のヨーロッパ文学の伝統を考えると共に、「文学においては古典主義者、政治においては王党派、宗教においてはアングロ・カトリック」という自己規定をおこなったが、その前年には英国国教会への回心と英国への帰化を終えていたことをみれば、Eliot が英国の社会や文学界に融和するためにいかに慎重であったかが分かる。Eliot より早くロンドンにきていた Ezra Pound が終始率直で「激しいアメリカ人」の姿勢をくずさず、英国の社会に融和しなかったのと対照的である。1920 年代以後、20 世紀前半の英国の文学界は『ケンブリッジ英文学史』に設定されているように、「エリオットの時代」となる。

さかのぼってヴィクトリア朝が Robert Browning と Tennyson に代表されるとみなすことはもはや定説ではないであろう。20 世紀に入って間も

なく始まったヨーロッパのほとんど全域にわたる芸術の革新運動、後にモダニズムという名称が与えられるようになった運動の一部として英詩を考えると、これら2詩人よりもむしろ Thomas Hardy と Gerard Manley Hopkins の存在がより重要であるとみなされるようになった。そしてまた W. B. Yeats は 19 世紀末から 20 世紀の 30 年代にかけて重要な仕事を達成し、T. S. Eliot と共に 20 世紀最大の英詩人とみなされている。初期の Yeats が Dowson, Symonds, Lionel Johnson らと興した the Rhymer's Club (1891 年創立) や Oscar Wilde ら decadents の退廃性は保守的なイギリスの一般大衆にも批評家たちにも scandalous な意味での興味の的になったかもしれないが、世紀が替わるとほとんど忘れられた存在になってしまった。しかし彼らの詩も life style も彼らの時代にはモダンだったといえるだろう。1908 年ロンドンに来た Ezra Pound は片方の耳にイヤリングをつけて、Wilde のように世間の関心を惹こうとしていたし、Imagists の一人である Richard Aldington は緑色のズボンをはいていたとドロシー・パウンド (Ezra Pound の妻) 述べているが、それも当時としてはモダンを気取ったスタイルだったのであろうが、彼らの詩もモダンだった。Pound がロンドンに来る前にヴェニスで自費出版した『ア・ルーメ・スペントー』(A Lume Spento, 1908) は Swinburn の影響があきらかな世紀末風のモダンであったが、翌 1909 年に T. E. Hulme らと起こした Imagist Movement は明確に新しい信条による 20 世紀の詩の始まりとなる詩の運動であった。それまでの Pound は Browning, Swinburn, Hardy, トルバドゥールの詩人たちから影響を受けていた。しかし Pound が "Make It New" という信条を持つに至ったのは Pound がイギリスにやってきた当時 *English Review* 誌を編集していた Ford Madox Heuffer (後の Ford Madox Ford) によるところが大きいと違いない。Heuffer は立派な散文のような明晰さと率直性をもつ韻文の必要性を説いたが、Pound が彼の考えに感化され、それが Imagism の信条箇条へと発展し、その idea を Yeats に伝えて Yeats の詩を現代化させた。

20 世紀の 10 年代には the Georgians (Rupert Brooke, de la Mare,

Edward Thomas, Edmund Blunden, John Masefield ら) と Imagists (T. E. Hulme, F. S. Flint, Ezra Pound, H. D. ら) が対立し、それぞれ沈滞していたイギリス詩に新風をもたらそうとしたが、Stephen Spender によればこれらは “modern” と “contemporary” という 2 つの異質な流れである。the Georgians は “contemporary”, Imagists は “modern” であるとされた。“contemporary” な芸術家たちは「現代的状況が存在することは意識しながらも、それが芸術に特別な問題だとは感じていなかった」が、「“modern” な芸術家たちは現代を前例のない時代、過去の文学や芸術のいかなる慣習にもそぐわない時代と感じるがゆえに、新しい芸術の創造に着手した。」<sup>1</sup> the Georgians の詩は A. E. Housman を父とするといわれているように、概してイギリスの伝統的牧歌の流れを継承しているのに対して Imagists の詩は概して都市の文学である。そして the Georgians の詩が本物でないのは、彼らが Wordsworth などと違って、都市の中の彼らの書齋でイギリスの田園をセンチメンタルに美化して歌った都会人の田園に対するノスタルジーに過ぎなかったからである。the Georgians は「うすめられたロマン主義」であるとか「気の抜けたビール」であるとか、とかく評価が低いですが、*Georgian Poetry 1911-12* は同書の Prefatory Note によれば「英詩はいま一度新しい力と美を増しつつあるという信念をもって」Edward Marsh によって出版されたのである。Marsh は当時の読者に近代詩への関心を今一度呼び覚まそうとしたのであった。この anthology は Marsh によって 1912 年から 22 年までに 5 巻出版されたが、どの巻も今日的標準からすればものすごく売れたのである。Georgians は大きな読者層を詩へ向かわせたのに対し、Georgians に対抗した modernists の運動(これは Imagists movement を指すであろう) は詩に背を向けさせたと 1962 年にペンギン版 *Georgian Poetry* の編者 James Reeves は述べている。Marsh はイギリスの教育のある大衆 (a large educated public) を念頭に置いていて、彼の視野はイギリスの外に及ぶものではなかった。美学的な批評原理を主張するのはイギリス的ではないと Reeves はいっている。<sup>2</sup>

Rupert Brook の “The Soldier” のような英国賛美や愛国心は英国人が

好むものであり、英国人の視野は parochial で modernism のような avant-garde の芸術を好まない傾向がある。そして the Georgians の詩は modernists の詩にくらべて一般に分かりやすいことも大衆に好まれた原因であろう。第一次大戦中の A. E. Housman の *A Shropshire Lad* の人気や、60年代以後の Philip Larkin や John Betjeman の詩集の売れ行きが一般の詩集の標準をはるかに越えるものだった理由もこのあたりに存在しているようだ。

Marsh が 1922 年で *Georgian Poetry* の刊行を断念したのは、この年に T. S. Eliot の *The Waste Land* が発表されたことと関係があったのだろうか。この 5 巻の Anthologies には合計 36 人の詩人の作品が発表されたが、D. H. Lawrence を除いて modernists と呼べるような詩人は含まれていない。詩風から見れば Georgian 的な Thomas Hardy や Georgians の精神的な父といわれる A. E. Housman (Anthology への寄稿をことわった) もこの中にはいない。

the Georgians とほぼ同時代の第一次大戦戦争詩人たち (Rupert Brook, Siegfried Sassoon, Wilfred Owen ら) も愛国的感情をうたったが、Owen や Brooks の才能は無視できないであろう。両者共第一次大戦で戦死し、大成することができなかったこと、English の血統の後継者が途絶えたことを惜しむ気持ちとが彼らに対する評価を高めているかもしれない。<sup>3</sup>

the Georgians の視野は parochial であり、Imagists のそれは international であった。前者が生粋の English であるのに対して後者の中心的詩人 Pound や H. D. などは American だった。

興味深いことは Pound が *Georgian Poetry* 1911-12 へ寄稿するはずだったことである。当初は Pound と Robert Frost が寄稿する予定であったが、編者の Marsh がアメリカ詩人を入れないことに決めたために彼らは除かれたという経緯がある。<sup>3</sup>

the Georgians はすべてイギリス人であったが、Imagists の主力はアメリカ人だった。この 2 つのグループの勢力争いは、それが競われた 1910 年代ころには、少なくともイギリスの読者層の多くの support によって前者

が勝利したかにみえた。しかし、結果的にみれば、the Georgians が英詩に寄与したものはほとんど何もなかったのに対して、Imagists は少なくとも「英詩のどこかが間違っているということの確認」(F. R. Leavis) はした。こんにち、Imagism を抜きにして英詩の近代化を考えることはできない。

D. H. Lawrence はどちらの Anthology へも寄稿している。Lawrence は imagism のことなどほとんど知らなかったようだが、すぐれた Imagism の詩を書いている。彼は the Georgians のような英国人の parochiality や Englishness 偏愛を pettiness (けちくさき) と考えたであろう。名作 "Snake" では彼が蛇に対して思わず棒切れを投げつけたことを後悔し、自分を蔑み、自分が受けた教育を呪う。そして「自分が償わなければならないものは人間のけちくさきである」といつている。

1909 年に出版された Pound の *Personae* は好評だったが、Pound が編纂した Imagism の anthology である *Des Imagistes* (1914) には Pound, T. E. Hulme, H. D. らのいくらかの佳作が認められるにしても、詩的業績としてはあまり問題にするほどのものではなかった。アメリカから Amy Lowell がやって来て彼女が刊行した *Some Imagist Poets* (1915, 1916, 1917) は Pound によって Amygism と揶揄されるほど墮落してしまった。Pound は画家で作家の Wyndham Lewis と組んで Vorticism の雑誌 *BLAST* で Victorianism を攻撃するなど、英詩壇に爆風を送ったが、ロンドンの批評界は Pound の努力に対して冷淡だった。イギリス社会と Pound は水と油のように溶け合わなかった、と Wyndham Lewis は述べている。それは Pound がイギリス人が嫌う「激しいアメリカ人」タイプだったからだ、と Michael Reck は述べている。<sup>4</sup> どんな時にも激することなく humour をもって対応するのが English gentlemen らしい態度だとすれば、Pound はあまりに率直で naïve だったのであろう。英国の文化人の gentility は洗練されているかもしれないが、Pound のような率直で激しいアメリカ人を野蛮な田舎者として受け入れない pettiness がそこには存在しているのであろう。Pound はそんなイギリスに業を煮やしたのであろう。1920 年に *Hugh Selwyn Mauberley* でイギリスの establishment に対して

痛烈な批判を行い、これをイギリス社会への決別の辞として新天地を求めてパリへ移住する。*Mauberley* は現代文化の破綻と不毛の中での生という *The Waste Land* と共通の主題をもっている。*The Waste Land* は *Mauberley* によって触発されて生まれたようだが、どちらもモダニズム詩の記念碑的な詩業であることを疑う人はいない。

*The Wild Swans at Coole* (1916) 以後の、*The Tower* (1932) を中心とする Yeats は modernist であって、もはやかつての “the last Romantic” ではない。Yeats と Eliot はその偉大さにもかかわらず、彼らの後継者を英詩壇に探すことはむずかしい。Yeats の場合、*A Vision* で述べられている哲学や異端的宗教思想は影響を受けるにしてはあまりにも個人的なもので、それらを理解し、みずからもそれらの思想に染まってしまうということは考えにくいからである。*The North Ship* (1945) の Philip Larkin のように、初期の “Celtic twilight” の melody に魅せられるということはあるにしてもである。

Eliot については *The Waste Land* の亜流は数多く生んだが、彼の批評や metaphysical な詩法の影響はイギリスよりもアメリカの the <Fugitive poets> (John Crowe Ransom, Allen Tate, Robert Penn Warren ら) に伝わった。

Hardy と Yeats は共に二つの世紀にまたがる詩人であるが、Hardy が高く評価されるのはずっと後のことである。Hardy の詩業は *Wessex Poems and Other Verses* (1898) から *Winter Words in Various Moods and Metres* (1928) に至る 8 冊の詩集 (総計 910 余篇) からなるが、生前の Hardy の詩人としての名声は小説家としてのそれに比べてはるかに小さなものだったといえるであろう。Hardy は modern な要素のない詩人であるが、Pound も Dylan Thomas も Auden も共に Hardy の詩を好んでいた。しかし Yeats は Hardy をあまり評価していなかったようだ。Yeats 編の *The Oxford Book of Modern Verse* (1936) に収録された Hardy の詩は 4 篇、3.5 ページに過ぎない。ページ数の多いほうから数えて 10 位の O'connor の収録ページ数が 9.5 ページであることからみれば、Yeats は

Hardy を minor poets の一人としかみなしていなかったと思われる。この anthology は編者の個人的好みが濃厚でなにかと物議をかもした anthology なのだが……。

F. R. Leavis は *New Bearings in English Poetry* (1932) で Hardy を「偉大な詩人」と高く評価しているが、「ハーディの大詩人としての位置はわずかに 10 篇あまりの詩によっている」<sup>5</sup>としている。

Hopkins をヴィクトリア朝詩人と考えるか、彼の詩が Robert Bridges によって出版された 1910 年代 (出版は 1918 年) の詩人と考えるかは意見が分かれるが、それは Hopkins の詩が彼が生きた時代に先駆けてモダンだったからである。sprung rhythm, 独特な alliteration, internal assonance など詩法上の革新で第 1 次大戦後の詩人たちに刺激をあたえた。Leavis は *New Bearings in English Poetry* で Eliot, Pound, Hopkins の 3 人を 19 世紀を超える詩的伝統を担う主要な詩人として論じている。Michael Roberts が編纂した *The Faber Book of Modern Verse* (1938) では T. S. Eliot に次いで 2 番目に多くのページが割かれている (ページ数の多い順から上位 5 人を挙げると、Eliot 26 ページ / Hopkins 20 / Pound 18 / Auden 16 / Yeats 15 である。)。ところがそれから 15 年後に出版された *The Faber Book of 20th Century Verse*, ed. by John Heath-Stubbs & David Wright (1953) でも、それからさらに 20 年を経た *Oxford Book of Twentieth Century English Verse*, ed. by Philip Larkin (1973) でも Hopkins の詩は全く収録されていない。Heath-Stubbs はこの anthology の序文で同書の性格について次のように述べている。「この詩歌集はトマス・ハーディからこんにちに至る、20 世紀の始め以降に書かれた英詩を表すことを目的としている」と述べ、Hopkins について次のように述べている。「ホプキンスは 19 世紀の終り近くに没した。ホプキンスの『詩集』は 1918 年まで出版されなかったこと、また彼が当時、善きにつけ悪きにつけ時代に先駆けて「モダン」だとして称揚されたという事実は、本書のように広範な一般的検討に関わるが、「傾向」(“trends”) や「影響」(“influence”) の検討に関わらない詩歌集においては考慮する必要がない。」<sup>6</sup> 要するに、Hop-



kins を『詩集』の出版年や彼の影響力に関わらず、彼が生きた時代によって扱ったということ、つまり Hopkins を Victorian として扱ったということである。

Larkin 編の anthology では「20世紀英詩」を「20世紀に英国に生まれたか、かなりの期間英国に定住して世評に上った詩人による英語で書かれた詩」という意味であることわっている。Hopkins についてはとくに何も触れられていないが、20世紀には生存していなかったから、この基準から外れたのであろう。Michael Roberts の *Faber Book of Modern Verse* の改訂版(4th edition) が Peter Porter の編纂で1982年に出ているが、初版(1936年)以来46年を経ていて、英詩の状況が大きく変化したための改訂版なのだが、「Roberts に利用できたが選ばれなかった詩は一つとして加えなかった」という方針が守られている。新しく加えられた詩人のために削除された詩人もあるが、Hopkins については全く変更を加えていない。

20世紀前半は Yeats, Eliot, Auden の3人がイギリス詩の主流を占めたということが出来るであろう。これに Pound を加えれば20世紀前半の英詩は外国人によって支配されたとみられてもしかたないであろう。A. Alvarez が *The Shaping Spirit* (1958) や1950年代にイギリスに登場した詩人たちのアンソロジー *The New Poetry* (Penguin, 1962) で述べているように、「エリオットらの実験的詩法は本質的にアメリカ人の関心事なので、イングランドにおいては本当の意味で受け入れられたことはない」という見解もある。イギリス詩におけるモダニズムの時代とはいつからいつまでかということに関してもいろいろな見方があるが、1908年に T. E. Hulme が無名の詩人たちと *Christmas 1908* という詩のパンフレットを発表したころからはじまって、Eliot が 'The Hollow Men' をふくむ *Poems 1909-1925* を発表したときまでのわずか20年たらず、あるいは W. B. Yeats の死の翌年 *Last Poems and Plays* が刊行された1940年までとみても、わずか30年間ほどの出来事だった。1890年代の世紀末詩人からとすればほぼ半世紀の期間になる。しかし Pound の *Drafts and Fragments of Cantos*

CX-CXVII までとみなすとするれば、これが刊行された 1969 年ということになる。しかし Pound はアメリカ詩人であり、かれがイギリスを去ったのは 1920 年のことであるから、これはアメリカ詩におけるモダニズムの出来事になる。

20 世紀が後半に入って間もなく〈the Movement〉といわれる詩人たちが登場し、やがてこれが modern な流れを大きく変えるような存在になっていった。“the Movement”の中でやがて Philip Larkin の才能が最も注目されるようになったが、それは Larkin の第 2 詩集 *The Less Deceived* (1955) 以後のことである。10 年前の *The North Ship* (1945) では初期の Yeats の pastiche という色彩が濃かった。「1943 年にオックスフォードを卒業後シュロップシャー州の公立図書館に勤務した。3 年間イエイツのように書こうと努めた。かれの個性や思想を理解したためではなく、かれの詩の音楽性に魅せられたからである。……正直いって、それはとりわけ影響力の強い音楽で、ニンニクのように浸透性があって、数多くの有能な才能を破滅させた。」<sup>8</sup> この Larkin の言葉は前述の Leavis の見解を裏付けている一つの例証であるとみることができるであろう。Yeats の「毒」は強烈で、単純な模倣を許さない性質のものなのだとということもここでも知らされる。詩人は magician であると yeats は考えていて、*A Vision* は yeats の magic の体系で「3 年間イエイツのように書こうと努めた。イエイツの個性は好きだったとか、かれの思想を理解したというのではなく、彼の音楽に夢中になってのことだった。その音楽は強力で、ニンニクのように染みわたり、多数の有能な才能を駄目にした」<sup>9</sup> と Larkin は述べている。*A Vision* を素通りしては Yeats の magic に感嘆することはできても、それを巧みに模倣することさえ困難であろうと思われる。*North Ship* はそのことを例証しているといえるであろう。

*The Less Deceived* で Larkin は大きく変貌を遂げている。それは 1946 年の早くのある朝 Hardy の “Thoughts of Fhena At News of Her Death” を読んだことから始まったという。<sup>10</sup> そして「ハーディを知るようになったとき、自分自身の生活の外に存在する詩というものの概念へと自分を励ま

す——多分イエイツが私にしようとしていたこと——必要がないと感じてほっとした。」<sup>11</sup>と述べている。LarkinはHardyを知って、かくあるべきだと思ふ詩を書くのではなく、かくある詩を書こうと思ったということであり、自分の生活の経験を書けばよいのだと知った。これがLarkinの詩の大きな転機となった。経験を記録することが生涯にわたるLarkinの詩の目的となる。

Larkinは後にDylan Thomasが今世紀のすべての詩人たちの中でハーディが最も素晴らしいと思っていたこと、イエイツがとびきり最も偉大であると思っていたが、ハーディが最も好きだったことをVernon Watkinsに知らされて驚いたと述べている。<sup>12</sup> Stephen Spenderの自伝*World within World*<sup>13</sup>の中にはAudenがオックスフォード大学時代に推奨した詩人の名前があげられている。Owen, Hopkins, Edward Thomas, A. E. Housman, T. S. Eliotである。しかしオックスフォード大学詩学教授就任講義『作ること、知ること、判断すること』(*Making, Knowing and Judging*)では次のように述べている。「私の最初の師はトマス・ハーディであるが、これはじつに幸運な選択だったと思っている。ハーディは良い詩人であり、おそらくは偉大な詩人でもあったであろうが、良い詩人でありすぎるといふことがなかった。わたしは彼の詩がとても好きだったが、その語法はしばしば不器用で不自然な形をとっていたり、明らかにかなり駄作が存在することが私にもわかった。完璧な詩人は私を絶望させたであろうが、彼は希望をあたえてくれた。」<sup>14</sup>

経験を記録することについてLarkinは次のように述べている——「私は私が見たり思ったり感じたりした事柄を私自身と他人のために保存するために詩を書く。私の主な責任は経験そのものに対してであって、ただその経験を忘れないようにするためだと感じている。なぜそうすべきなのかは分からないが、保存しようとする衝動はすべての芸術の根底に存在していると思う。……すべての詩はそれだけで新たに創造された宇宙でなければならないと私は信じている。したがって、いわゆる「伝統」とか平凡な神話の蓄えや他の詩や詩人たちへのおざなりな引喩を信用しない。引喩は

立派な人を知っていることを知らせようとする文学の下っぼどもの話のようにわたしには不快である。」<sup>15</sup> この後半部はもしかしたら Eliot を暗に批判しているのではないかと思われなくもない。後にはきわめて控え目で大言壮語を好まなかった Larkin にしては、文壇に登場しようとする若者らしい気負いか、かなり大胆な発言のように受けとれる。

ほぼ 30 年英詩壇に君臨した Eliot は 1944 年に *Four Quartets* を完結させ、彼の詩業を完成させた。40 年代には Dylan Thomas がケルト的ヴィジョンと魔術的な音楽性などで Yeats, Eliot, Auden に続く世代の major poet とみなされているが、この天才詩人の意外な早逝 (1953 年) 後、英詩壇は一種の空白状態にあったとみられる。Auden はすでに 1939 年にアメリカに移住し、46 年には市民権を得ていた。桂冠詩人 Sir John Betjeman は英国の一般読者好みの England に対するノスタルジアを歌っていて、Hardy や Housman につながる地方性にとどまる詩人で、Spender がいう contemporary な詩人である。Betjeman は Hardy の真の後継者であると Larkin は述べている (Betjeman is a true heir of Thomas Hardy.) が、Larkin はこの二人の後継者であり、彼の詩の特色の一つも地方性にあるが、上の 3 人と異なるのは突き放した irony の感覚である。Larkin には自己憐憫的なところがない。第二次大戦後の沈滞したイングランドの田舎、工業地帯、都会や郊外とそこに住む人間たちの哀感を感傷をまじえない正確な言葉で記録している。

アメリカ版の『ベッチェマン詩集』の序文で Larkin は、「もし私がイングランドを離れる兵士なら、ベッチェマンのこの詩集はもっていききたいものになるだろう時々思った。思い出したいことをこれほど保存している詩人を他に私は考えられない」と述べている。<sup>16</sup>

Larkin はイングランドの社会とそこに住む人間の姿を保存することを Hardy や Betjeman から学び、これを受け継いで生涯の仕事としたのである。そして「エリオットが 20 世紀の前半を支配したように、後半はベッチェマンから派生するということがありうるのではないだろうか」<sup>17</sup> とまで述べている。この言葉は Hardy から始まってベッチェマンを経て Larkin へ

とつながる流れが20世紀後半の主流となるかもしれないという自負も含んでいるようである。

Hardy にさかのぼる流れにつながる Larkin が1950年代後半以降のイギリス詩の主流を占めたかにみえる様相を呈してきたのは彼の第3詩集 *Whitsun Weddings* (1964) 以後のことであろう。英国の愛国主義者たちからみれば英詩は外国人支配から脱して再び English の血統へ復帰したことになる。Yeats から Eliot, Auden へと続いたモダニズムの激流は治まり、新しい流れがゆるやかに流れ始めた。

〈the Movement〉の anthology である *Poets of the 1950's* の序文 (“Poetry in England Today”) で Enright は「エリオットとオーデン……によって開拓された進路にはその後なにらの重要な進展もない。……前者はイングランドの文学の比喩的表現やミュージック・ホールの型にはまった表現に向かい、後者は彼のロマンチックな色彩を露呈した。1930年代以降『荒地』が反対した方向へははっきりと後退してきている。最近の現代詩のアンソロジーには驚くほど多くの割合のなまぬるい「自然詩」が含まれている。上品に作られていて、その実無意味な詩で、今世紀はじめのジョージアン・ポエトリーのあまり才能のない詩人でももっとうまく書けたであろうようなしろものである。……明日の真の詩人は「荒地狂い」という死んだ馬にむち打つのもなく、また「ニュー・ロマンティズム」とかいふものを達成しようとする空しい試みに感傷的に正反対の事柄へと飛翔するのでもない者たちの中に見いだされるであろう。」<sup>18</sup> と述べている。

上でも指摘されているように、イギリス詩におけるモダニズムが提起した問題や詩法は未解決のまま残された。小説の分野では James Joyce が *Ulysses* (1922) と *Finnegans Wake* (1939) によってモダニズムの方法を完結させたと思われるのに対して、T. S. Eliot の *The Waste Land* (1922) は Eliot にとってモダニズムの詩法における実験であり模索であったが、Eliot はこの詩法を発展させて完成するのをしなかった。*Four Quartets* (1944) は詩人 Eliot の完結点であったと思うが、それは宗教的・哲学的詩人としての Eliot の完結点であって、*The Waste Land* の延長線上の、つま

りモダニズムの詩人としての Eliot の完結点ではない。そして Eliot 以後の詩人で『荒地』の影響をうけなかった人はいないとまでいわれながら、『荒地』の亜流的作品は多数書かれたが、『荒地』をしのぐものがないこともまた指摘されている。もし Pound の *Cantos* までを含む全業績をモダニズムと考えれば、それは Joyce に匹敵する業績であるといえるかもしれないが、*Cantos* は Pound 自身が詩人としての生涯の終り近くなって失敗であったと述べている。筆者は *Cantos* について評価する力も資格もないが、Pound が考える理想的な世界の経済を含む歴史や文化史を主題とするこの膨大な構想をもつ連作からなる詩は詩人 Pound のほとんど生涯をかけた仕事であったが、完成ということはもともと考えられないような性質の作品であると思われる。Pound が詩人としての生涯をかえりみて、最後に自分の生涯をかけた仕事が失敗であったと感じたということは（もちろん Pound は 20 世紀英語文学において Yeats, Eliot と並ぶ詩人として最高の位置を占めると評価されていて、*Cantos* が失敗作であるとしても比類なく偉大な失敗作だったと考えられているのだが）Joyce がおそらくみずからの業績に対して自負と満足感をもっていただであろうと思われるのに対して、Pound に悲劇的詩人という印象を与えている。

1973 年に発刊された Larkin 編纂による『オックスフォード 20 世紀英詩選』(*The Oxford Book of Twentieth Century English Verse*) は反モダニズム色濃厚なアンソロジーで、これより 37 年前の Yeats 編纂による *The Oxford Book of Modern Verse* (1936) の場合のように、収録詩人の選択に偏りがあるということで物議をかもした anthology である。とくに major poets の判断において異常な偏向があると感じた批評家も多かった。「急進的にモダンで実験的なものから離れて、minor poets や伝統的詩型への決然たる偏向によって人を驚かした」<sup>19</sup> と Glevel Lindop は述べている。10 ページ以上のスペースを与えられている詩人は 8 人いて、収録順(生年の古い順)に次のようになっている。

	ページ数
T. S. Eliot	30
Hardy	25
Auden	24
Yeats	21
Kipling	20
Betjeman	18
Bunting	11
D. H. Lawrence	10
D. Thomas	10
Squire	10

この『詩選集』の詩篇の総ページ数 625 ページ、収録詩人数 193 人で、ある。この 8 人の詩人が Larkin の判断による Major Poets と考えてもよいであろう。だれも異論のないような『詩選集』を編むことはもちろん不可能であろうが、これら 8 人の名前の中に Hardy, Kipling, そして Betjeman の名前が入っていることに驚かされた読者や批評家は数多くいたであろう。Kipling はノーベル文学賞授賞者であり、Betjeman はこの『詩選集』刊行時の桂冠詩人であったにしてもである。ちなみに、Yeats 編『オックスフォード近代英詩選』における Hardy は 3 ページ強にすぎなかった。编者 Larkin はみずから編纂したこの『詩選集』について次のように述べている。

「私はハーディのような人びとと共に 19 世紀から続く（もっとよい表現がないのでこういう言い方をしますが）English tradition といったものが存在したのかもしれないと考えていました。この伝統は一部分は第一次大戦によって中断されました。それは多数のイギリスの詩人が戦死したためであり、また一部分はイエイツの本当にすさまじい衝撃によって中断されたのです。イエイツはケルト人であり、エリオットはアメリカ人だと私はみなしています。」<sup>20</sup>

これはまさしく偏狭なまでの“Englishness”の主張である。こうした考えがイギリス文化の体制の中に存在していることがイギリス人を保守的、島国的といわせるのであり、イギリス文学の中に国際的なモダニズムを受入れがたいものにしていく要因であると思われる。

モダニズムの精神や詩法はいまなお新鮮にみえ、これが提起した問題はいまも理解が十分でなく、これからも綿密な検討を必要とする重要事であるが、運動としてのモダニズムが一時代のエートスとして終わったことは認めなければならないにしても、Larkinの判断では「モダニズム」はイギリス詩の伝統ではないとみなされたのである。〈ムーヴメント〉詩派にとって「詩人は靈感をうけた風変わりな人間ではなく、それどころかまったく隣の住人のような人間なのである。」<sup>21</sup> という指摘があるように、ロマン派から象徴派、そしてモダニストへと続いてきた社会から孤立した詩人というイメージは〈ムーヴメント〉詩派によって塗り替えられようとした。Larkinの詩には自動車工場で働くさえない中年の独身男（‘Mr Bleaney’）や団地の遊園地で幼い子供を遊ばせている若い母親（‘Afternoons’）や子供づれで海水浴に毎年やってくる親たち（‘To the Sea’）、娘の新婚旅行を駅のホームで見送る親や親族たち（‘The Whitsun Weddings’）、広場でひらかれる見せ物に集まった庶民たち（‘Show Saturday’）など平凡な庶民たちの姿を哀感をこめて描いている。「ラーキンは大抵の人が感じるように感じたことを日常普通の言葉で表現する」<sup>22</sup> と Patrick Swinden は述べている。Larkin は Picasso や Pound が嫌いだといっているが、それは「彼らが新しいからではなく、われわれが知っている人生に矛盾する無責任な技法の開発をおこなっているからだ、Henry Moore と James Joyce についても同様のことがいえる」<sup>23</sup> と述べている。Larkin は反モダニズムの旗手であった。1979年から80年にかけてケンブリッジ大学英文学部で筆者が聴講した George Watson 氏の講義で“Modernism was struck down.” という言葉を聞いたことを思い出す。当時のイギリス詩壇には Larkin が自他共に認める第一人者として君臨していた。陰の桂冠詩人という声ももっばらであった。（実際の桂冠詩人は Larkin が敬愛する John Betjeman だった



が……) *High Windows* (1974) までほぼ10年おきに詩集を発表してきたので、新詩集の出版を首を長くして待望している人びとが多かった。しかし、そのころのLarkinはほとんど沈黙をまもっていて、*High Windows* 以後に雑誌その他に発表した詩の数は5指に満たなかった。このことが後にBetjemanなきあとの桂冠詩人の決定にさいしてLarkinが辞退した理由とされている。(Ted HughesがBetjemanの後任として選ばれたときにはなぜLarkinでないのかという声が多くきかれたのであった。)

Yeats, Pound, T. S. Eliotはたしかに20世紀を代表する偉大な詩人であることはLarkinも認めざるをえなかったであろうが、彼らは外国から移植された花なのだという認識があり、彼らがおこなった詩における偉大な革新である「モダニズム」を否定して別な流れに変えてしまったとみなされていた。Eliotは*Ash-Wednesday* (1930) 以後、宗教的、哲学的、モラリスト詩人へと変わっていったし、AudenはYeatsやEliotからモダニズムの詩法を引き継いだが、1958年のペンギン版『自選詩集』(*W. H. Auden, A selection by the author, The Penguin Poets*) (1927年から54年までの作品からなる)でひとつの区切りをつけたとみなされる。そして詩的時代は反モダニズムの〈ムーヴメント〉の時代となる。Englishnessの復活である。このころ(1970年代の終りころ)の英詩壇にはLarkinが自他共に認める第一人者として君臨していた。しかし、それではモダニズムの詩法はいつたどこへ行ってしまったのか、〈ムーヴメント〉の登場と共に消え去ってしまったのかと私はケンブリッジ大英文学部の教室でWatson氏の講義を聴きながら思ったことを思い出す。しかし私は同じ学期に開かれていたJ. H. Prynne氏の近代詩の講義も時々聴講していた。当時Prynne氏は若い気鋭の講師であったが、大教室があふれるほどの学生で埋まっていた。私は氏が詩人でもあることをだれかに聞いて知っていたが、イギリスでは珍しいavant-gardeな詩を書いていたことは知らなかった。Seamus Heaneyを別にすれば、氏は現在最も注目されている英詩人である。モダニズムの実験的精神はイギリスにおいて、しばらくの間途絶えたかにみえたが、Larkinが君臨していた時代の底で脈々と流れ続けていたのである。

Larkin より少しおくれて登場した Ted Hughes は野生の動物の暴力的なほどの生命力にもっぱら強い関心を示していて、シュルレアリスムのイメージもみられるが、モダニズムがおこなったような外国の文学や文化についての allusion はなく、多くは彼の出身地であるヨークシャーなどの田舎を舞台としている。しかし Ted Hughes を Englishness の賛美者ということはできないであろう。彼の関心はイングランドの大地にあるというよりも、野性的な自然そのものの中で生存競争を繰り広げながら生きている生物たちの荒々しい生命力にある。そのエネルギー探求の力強さは D. H. Lawrence を思わせる。

現在イギリス詩壇で最も注目されている Seamus Heaney はアイルランドの先輩詩人 W. B. Yeats のような、アイルランドを伝説や神話の国としてみることから脱却することから出発し、アイルランドの大地の“bog”（湿原）を掘るように、歴史の層を掘り下げ、アイルランドの過去と現在の姿をとらえようとしているようにみえる。

20世紀後半はイングランドのみならずアイルランドにおいてもモダニズムの国際性を離れて、みずからの国の地方性、独自性へ向かう傾向が濃厚になったように思われる。

\* 次に 20 世紀を代表する英詩の anthologies のいくつかについて、収録されたページ数の最も多い詩人から 10 位までを一覧表にして示す。

- ① *The Oxford Book of Modern Verse, 1892-1935* ed. by W. B. Yeats (OUP, 1936)
- ② *The Faber Book of Modern Verse.* ed. by Michael Roberts (Faber and Faber, 1936)
- ③ *The Faber Book of 20th Century Verse,* ed. by John Heath-Stubbs & David Wright (Faber and Faber, 1953)
- ④ *Oxford Book of Twentieth Century English Verse,* ed. by Philip Larkin (OUP, 1973)

① 1936		② 1936		③ 1953		④ 1973	
1. Wellesley	24	T. S. Eliot	26	Barker	8	T. S. Eliot	30
2. E. Sitwell	18	Hopkins	20	Pound	8	Hardy	25
3. Read	17	Pound	18	Yeats	7	Auden	24
4. W. J. Turner	16	Auden	16	Auden	6	Yeats	21
5. Binyon	16	Yeats	15	Graves	5	Kipling	20
6. T. S. Eliot	13	MacNeice	10	Hardy	5	Betjeman	18
7. Gogarty	12	Graves	9	kipling	5	Bunting	11
8. Yeats	12	Lawrence	8	Lawrence	5	Lawrence	10
9. S. Moore	10	Spender	8	D. Thomas	5	D. Thomas	10
10. O'Connor	10	Owen	7	Watkins	5	Squire	10

\* ページ数は四捨五入 (9.5 ページは 10 ページとした)。

### 注

1. Stephen Spender, *Struggle of the Modern* (London, 1963) 71.
2. James Reeves, *Georgian Poetry* (Penguin, London 1963) xiv.
3. James Reeves, xiii.
4. Michael Reck, *Ezra Pound: A Close-Up* (New York, McGraw-Hill, 1967.) 邦訳：高田美一訳，マイケル・レック『エズラ・パウンド』（角川書店，昭和62）41.
5. F. R. Leavis, *New Bearings in English Poetry* (Pelican Books, Penguin, 1972) 48.
6. John Heath-Stubbs & David Wright (ed.), *The Faber Book of 20th Century Verse* (Faber and Faber, 1953) 19.
7. A. Alvarez, *The New Poetry* (Penguin, revised ed.1966) 21.
- 8, 9, 10, 11. Philip Larkin, *The North Ship* (Faber and Faber, London Boston, 1973) Introduction.
12. Philip Larkin, *Required Writing* (Faber and Faber, 1983) 175.
13. Stephen Spender, *World Within World; The Autobiography of Stephen Spender* (Hamish Hamilton, London, 1951)
14. W. H. Auden, *Making, Knowing and Judging* (Oxford UP. 1956); W. H. オーデン／中桐雅夫訳『染物屋の手』（晶文社，1973年）42 ページ。
15. *Poets of the 1950's*, ed. by D. J. Enright (Kenkyusha, Tokyo 1955) 77-78.

16. *Collected Poems of John Betjeman* (Boston: Houghton Mifflin, 1971)  
reprinted in Philip Larkin, *Required Writing*. 214.
17. *Required Writing*, 218.
18. *Poets of the 1950's*, 2.
19. Glevel Lindop, "Being different from yourself: Philip Larkin in the  
1970s" in *British Poetry since 1970: a Critical Survey* (Peter Jones and  
Michael Schmidt, eds., Carcanet New Press, Manchester, 1980.) 47.
20. Philip Larkin, "A Great Parade of Single Poems: Interview with  
Anthony Thwaite"; *The Listener*, 12 April 1973, 473.
21. A. Alvarez, 25.
22. Patrick Swinden,
23. *Required Writing*, 297.